

東方草華記～JCが幻想 入り～

萩村和恋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少女は突如、その楽園へと迷い込んだ。

この物語は、少女が幻想郷でゆったりまったり時に戦闘したりする、そんな在り来りな物語。

目次

一話、迷い込んだ少女	1
幕間く不老不死青年の説明みたいなもの	14

一話、迷い込んだ少女

日本、関東某県に住居を持つSPJC超絶可愛い女子中学生な私、木津多杏子きづたあんずは今道に迷っていた。

学校指定の白のセーラー服に、紺色のミニスカート、黒のタイツに身を包んだ私の姿は何処にでもある女子学生そのものだ。

しかし問題は周り……確かに私の地元は田舎だが、森がこんなに生い茂っている程田舎でもないのだ……そう、つまり、つまりなんだけれど。

「……地元じゃない……?ていうか思い出そうにも記憶が……。」

どうやら私は、記憶を一部失って見知らぬ土地に迷ってしまったようだ。

「こんな在り来りな始まりでこの小説大丈夫なの……?」

「とりあえず落ち着こう……落ち着いて人と会えそうなどころまでひたすら歩こう。行動あるのみ! LETSWALK!」

と、足を前に出して進もうとしたその時、私の足は、心臓は、神経は震え上がった。

だって火を見るより明らかなやつがいるんだもん、何アイツ? 凡そ人とは思えない奴がいるよ? ソイツは確かに人型なんだけれど、でも、でも絶対に人じゃないってわかる。

触手とも言うべきものが、ソイツから生えているんだもの。

「いつ、いやあああああああああああ！」

絶叫、普段なら興奮すべき所だけど今のこの状況では楽しめない！そもそも私のいた所ではあんな怪物がいたという伝説さえもないのだから！

「につ、逃げなきゃっ……逃げなきゃ逃げなきゃ逃げなきゃ！」

ただひたすら走る！訳が分からなくても走る！怪物は既に私に気付いて襲いかかるうとしているのだ！捕まったら最期になったってなんら問題じゃない……ッ！

「■■■■? ???」

「たっ、助けて！誰か！誰か助けて下さい！」

怪物は吼える、その雰囲気からは獲物を見つけた獣のソレに近い。

捕まったら死ぬ！

もうどれほど走っただろうか、怪物は依然私を追いかけてくる。

体力に自信はあったけど、異常事態で身体はしっかりとと言うことを聞いてくれない、ほぼ本能で足を動かす。

後ろをチラ見してみると先程と少し変わっており、何やら変な粘液を垂らしながら触手を伸ばしてきていた。有り体に言ってもエロい……いや、こんな事を考えている場合ではない！

「きゃっ!? つつ!」

足元の木に躓き、地面に勢い余って叩きつけられる。痛い…タイツは破れてしまつた。

触手が迫ってきて…

「っ!? やっ、やだ! 離して!」

ヌルヌルした触手が足に絡まつて私を吊し上げる、そのせいで白いお腹は見え、スカートが裏返りパンツがさらけ出される。怪物は無表情（顔がエイリアンのようである）まり見てて気分のいいものでは無いだろう。）でただ私を見つめている。そんな怪物に私は睨みながらひたすら叫ぶ。

「いやだ…こんな所で死にたくない! 幸せになりたい! 平穩に暮らしたい! だから離して! 貴方なんかには私は負けない!」

…この気持ちは一体なんだろう。

ずっと居着いていた…この感情は…絶望と恨み? なんでこんな気持ちか…。

触手が私の股へと伸びる。

ああ…きつと辱められるのだ

純潔を失い、コイツの苗床になるかもしれない…。

……いや、まだ諦めない！まだ抗ってやる！

私はそしてもう何も失主人うもんか！

グシャアツ！と地面が割れた。

鳶が生えてきたのだ……とても大きく、鋭く、私を守ってくれるようにその鳶は、怪物の触手から私を逃した。

「なっ、何コレ……!?!」

いきなりなんで生えてきたんだろうか……!?!……まさか……そんな事が……?
触手は再生し再び私を襲いにくる。

「っ……！鳶よ生えろ！」

強く念じながら叫んでみる、さつきもこのような感じだった筈だ……。

案の定、鳶が私を守るように互いに絡み合っ盾を作る。

「っっ、これさえあれば……！」

いける！何かわからないけどこれなら生きれるはず……！

「うおおおおおおおおおお！」

鳶を怪物にまきつけるイメージを頭に浮かべて叫ぶ、鳶は地面から生えてきて怪物を絞め付けた。

「この隙に……！」

そう言つて逃げ出そうとした瞬間。

ドゴオツ！と凄い音と……

「■■■■■■■■■■！」

悲鳴のような怪物の声が、背後から聞こえてきた。

「え……？」

驚愕の表情を浮かべながら腰を抜かす。

「大丈夫でしたか？」

後ろから声がかけられる、凜とした綺麗な声。

「はっ、はい……。」

その声の方を向くと、チャイナ服に身を包んだ赤髪の美女が、怪物の返り血に浴びながら私に手を伸ばしてくれていた。

「なら良かったです、立てますか？人里まで送りますよ。」

「ありがとうございます……人里？」

彼女の手を握って立ち上がり、疑問を感じたので聞いてみる。

「貴女のような人間達が暮らす場所です、人里出身では無いのですか?」

「あ…はい。」

「…?もしかして、外の世界から来たとか…?」

「外の世界…?」

外の世界とはどういうことだろう?この世界に外も中もないと思うのだが…。

彼女は口には手を当てるで考えた後、私の手を握って

「えっと…取り敢えず、とある場所に一応行ってみようと思うので着いてきてくれますか?」

とある場所へと連れていってくれるようだ。

「はい。」

「私は紅美鈴ホンメイリンです。貴女は?」

「私は木津多杏子です…えっと、敬意を込めてお姉様と呼ばせてください!」

「そつ、それはちよつと…。」

ちよつと引いてる!?!ならばこちらで…

「ならお姉ちゃんと呼ばせてください!お願いします!」

「はっ、はい!」

「やったアアアアアア！」

「アハハ……。」

お姉ちゃんは苦笑いをしている。しかしこうして見ると……本当に綺麗な人である、胸も大きい……へへっ……おっばい……おっばい……

「あの……大丈夫ですか？杏子ちゃん。」

「おっばい……。」

「へ……!？」

「ハッ……ごっつ、ごめんなさいなんでもないですよいや本当おっばいに顔填めたいとか考えてないですおっばい！」

「とっ、取り敢えず落ち着きましょう!?!なんか変ですよ!?!」

凄いい心配された、いや当たり前だ、誰だってこんな不審者じみた挙動をした少女を見れば心配ぐらいするだろう。

深呼吸をして息を整えて、美鈴お姉ちゃんの方をむく。

「しっ、心配掛けてゴメンなさい……。ちよつと興奮しちやつて。」

「興奮……?何故ですか？」

疑問を持ったのか、彼女はキョトン顔で尋ねてくる。私は微笑みながら答えた。

「美鈴お姉ちゃんが綺麗だったから興奮したの♪」

美鈴お姉ちゃんは褒められて恥ずかしかったのか、頬を染めてオドオドしていた。

「…さて、着きましたよ。」

あの後、世間話等をしながら一緒に歩いていると、とても長い階段の前にたどり着いた。

「ココは?」

「博麗神社です。幻想郷にしているにしても外の世界に戻るにしても、ここに来た方がいいと思ったので。」

「成程……。」

帰る…私が元々居た所に帰れる…何故だろう、嬉しい筈なのに、帰ったって意味が無
いって勘が叫んでる。

「さ、上のほりますよ。」

「はい。」

階段を上り終えた先、紅白の巫女服（よく見ると脇の部分が空いており、そこからサ
ラシが見えた。）を着た少女が神社の境内の掃除をしていた。

少女は私たちに気付くと、整った顔を驚きの表情に染めながらこちらに声を掛けてき
た。

「あら、珍しい客ね。そっちの子は？」

「こんにちは霊夢さん。外の世界から来たみたいなんです、杏子ちゃん…この子。」

霊夢と呼ばれた少女はその言葉を聞くと、私の方を向くと

「ふーん…ねえ貴女、外の世界に帰りたい？」

と、問いかけてきた。

「…？何故…？」

「貴女、外の世界で忘れられてるみたいよ？」

その言葉を私は理解出来なかった。美鈴お姉ちゃんが、代わりに答えてくれた。

「忘れられてるって…？どういう事ですか？」

神秘的顔で質問する美鈴お姉ちゃん、少女は少し考えた後に

「…おおかた家族がもういないか、はたまた知り合いなど出来ず、家族からも嫌われていたのか…。どんな可能性にしても、この子は帰るところは無いわ。幻想郷で暮らす方が良い…って事よ。」

少女は淡々と言葉を紡いでゆく。

「そんな…」

美鈴お姉ちゃんは表情を暗くする。

「で、どうするの？外の世界に帰る？ココにいる？」

少女は、再度私に問いを投げる。

私は…

「…ココに残ります、元の世界に帰るところが無いなら…私、この世界に残ります。」
帰るところが無いならココに残ればいい。大体元の世界にいた頃の記憶はバラバラで曖昧だし…ココはこの世界で第二の人生を送るとしよう。

「そう……。私は博麗霊夢、ここの巫女よ。貴女、名前は？」

「木津多杏子です。」

「杏子、美鈴のどこに行く？それともココで暮らす？」

「…？美鈴お姉ちゃんのとこで暮らせるなら…そつちがいいです。」

「そう。美鈴、今から紅魔館に帰るんでしょ？私も行くから。」

「はっ、はい…。」

「それとこの子の事は私から紫に言うわ。」

と、霊夢さんが美鈴お姉ちゃんに話しかけた時。

空間に亀裂が入った。

「その必要は無いわよ。盗み聞きしたから♪」

その亀裂の中から、妖艶な雰囲気漂わせた女性が現れた。

「ひっ、人…!？」

「不正解、私は妖怪よ。」

「妖怪……？」

この人は一体何を言っているのだろう……？

「『何を言っているかわからない……けどさっきの登場の仕方は人間じゃないよね……』とでも言いたげな表情ね？でも貴女、さっき明らかに人間じゃない奴に追いかけられたでしょう？というか貴女も……と、この話はまた今度にしようかしら。」

「なんでその事を……。」

「貴方が幻想郷に入ってからずっと見てたもの。わかるわよ。」

それって……つまり……

「あつ、貴方は！私が助けを求めていたのに……何で！何で助けしてくれなかったんですか!？」

「殺されてしまえばそれまで、でももし生き延びたら面白そうって思ったのよ。それに……彼ら怪物の中には人間を食らう種族もある、ココは人間と人外が共存する楽園なのよ？……まあ、結果は面白かったし、別に害は与えないわ。」

女性はヘラヘラしながら私に告げた。

と、ココで話に入ってきたのは霊夢さんだった。

「ねえ紫、その面白かった……ってというのはどういう意味？」

「この子、能力が開花してるのよ。本人は気づいてないだろうけど……二つも、ね。」
「……そう……なのね。」

「能力……？ なっ、何の話ですか……？」

話についていけず、霊夢さんに質問した。

「能力は人外なら誰でも……人間でも、少しでも才能がある人には開花することがあるわ。ちなみに私は空を飛ぶ程度の能力よ。」

「その……私にもそれが宿ってるって事ですか？」

この疑問に答えてくれたのは霊夢さんから紫と呼ばれていた妖女だった。

「そう、貴女の能力は『生えさせる程度の能力』と『咲かせる程度の能力』よ。さつき怪物から逃げる時、貴女は『生やし』て攻撃を逃れた。咲かせる程度の能力は……そのうちわかるでしょう。」

「そう……ですか。」

「ええ。」

沈黙……、会話が繋がらない。

その沈黙を破ったのは、美鈴お姉ちゃんだった。

「えっ……と、杏子ちゃん、そろそろ紅魔館……私の住まわせてもらっている館に行きましよう。」

「あつ…うん。…それでは失礼します。」

私と美鈴お姉ちゃん、それと霊夢さんは階段を降りて、こうまかん？というところに向かった。

幕間～不老不死青年の説明みたいなもの～

皆！元気かな？私だよ私、著者の萩村だよ！いや、本編前にまで出てきて言うことではないけれど、今回のお話は次に書く杏子たんが紅魔館に着いた時にいるオリキャラの説明みたいなものなんだ！じゃあ本編に移るね？さよならーめん。

レミリア）この空間は一体……？

尋音）目が覚めたかレミリア。どうやら今回は俺の説明らしくてな。どうせあのバカ著者の事だ、俺とレミリアに話させながら分かってもらおうとしてんだろ。

レミリア）成程……？つまりココはメタ空間って訳ね？

尋音）まあそうなるな。

レミリア）じゃあまずは自己紹介からかしら？私はやるべき？

尋音）俺だけでいいだろ。えーということ皆様、この様な形で初対面となってしまうましたが、私レミリア・スカーレットの旦那、華宝かほうひろね尋音と申します。種族は元人間で、今は不老不死の妖怪やってます。

レミリア）えっと次は……そうね、妖怪になった経緯とか話してもらおうかしら。私

も聞いた事なかったし。

尋音) アレ? 話したこと無かったつけ?

レミリア) 無いわよ。

尋音) あー…まあ簡単に言うとな、遠いとおーい昔の博麗の巫女との約束が原因だな。幻想郷の守護と人と妖怪たちの守護。それが俺に掛けられた約束でな。

レミリア) そうなのね……。で、どうやって妖怪に?

尋音) しらね、いつの間になつてたんだよなあ。

レミリア) 適当ね…なんか無いの?

尋音) あー…まあアレだ、人魚の肉でも食つたんじゃねえ?

レミリア) ……それで納得するわ。じゃあ次ね、能力は何かしら?

尋音) 『ありとあらゆるものを繰り返す程度の能力』と『ありとあらゆる術を扱う程度の能力』だな。

レミリア) 具体的にはどんな能力なの?

尋音) 同じ時間を繰り返し返したりい、世界をずーっと同じように繰り返し返したりい…まあそんな感じだそんな感じ。同じように生命体でもいけるぞこれ、擬似的だが不老不死を作れる。後は術つてつけばなんでも出来る。医術魔術妖術召喚術…なんでもござれつてきたア。

レミリア) よくわからないけど…ある程度はなんでも出来るっこと？

尋音) まあ…そんな感じだ。

レミリア) じゃあ次行くわよ、貴方、外の世界で生活していた時があったそうね。

尋音) あーあったあった。俺な、外の世界にも家あるんだよ。

レミリア) そうなのね…どんなお家なの？

尋音) 人が少ない町の外れにある普通の家だよ。

レミリア) あらつまらないわねえ、山奥とか想像してたのに。

尋音) 想像するなやめてくれ。あつちの家はあんまり帰らないんだよなあ……。

レミリア) 誰か暮らしてるの？

尋音) あー…まあ、外の世界の方の友人がな、今もずーつといるはずだぜ。

レミリア) へえ…そうなのねえ。

尋音) 次の質問は？

レミリア) いや、もう質問は無いわ。

尋音) そんじやあもう終わりか？

レミリア) ええ、終わりよ。

尋音) よーしじやあ帰ろうさつさと帰ろうか。レミリアたん早く帰ってイチャつき

たいんだよ！

レミリア）あーはいはい分かったわよ、ではご清聴ありがとう。また次回。
尋音）また次回。